

15. 二村 一夫氏

にむら・かずお 法政大学大原社会問題研究所教授

日時 : 2002年9月26日

出席者 : 伊藤隆 有馬学 小池聖一 中見立夫 梶田明宏 伊藤光一 土田宏成
萩谷茂行 大久保文彦 梅崎修 濱田太郎 矢野信幸 黒澤良 清水唯一朗
駄場裕司 高山京子 山田潤三 今津敏晃 近藤秀行 高橋初恵

伊藤 二村先生にお話を伺うということで、会を始めたいと思います。二村先生は、昭和31年に東大の国史学科を卒業されたということです。私は昭和33年に卒業しておりますので、実は先輩なのですが、年齢から申しますと、私のほうが確か年寄りだと思います。

二村 はい、駒場では恐い先輩でした(笑)。

伊藤 二村先生は結構、こわもてな方でありましたので、私はおっかないなと思って付き合い合っておりましたが、とにかく大原社研というと二村先生という存在でありまして、きょうは、大原社研のことをたぶん中心にお話しいただけるのだらうと思います。1時間か1時間半、あるいはもう少し延びても構いませんので、自由にお話しいただければと思います。皆さんのお手元には、この間、お知らせいただきました二村氏の「大原社会問題研究所との43年間」という文章だけをお配りしてあります。あと、ほかのものは回覧するというようにしておりますので、よろしく願いいたします。

二村 二村一夫でございます。こんなに大勢の方の前でお話しするとは、予想していなかったものですから、ちょっと準備不足ですがお許しください。

私は1956年に東大の国史学科を出まして、法政大学の大学院に行きました。法政を選んだ理由の1つが、労働運動史、社会運動史関係の史料の宝庫である大原社会問題研究所が法政にあるからでした。学部の卒業論文を書いている時に、大原研究所が戦前に出した『日本社会主義文献』を見て、この研究所に貴重な史料が大量に残されているらしいことを知って、これを使って勉強したいと考えたのでした。

実際に研究所にいったのですが、貴重な史料があることは事実でしたが、大きな木箱にぎっしり詰められ、土蔵に山積みになっていて、全部見た人はまだ誰もいないという状態でした。史料の宝庫ではあったのですが、とても使える状態ではありませんでした。整理する場所もあまりなかったのです、土蔵から少しずつ運び出し、何があるかを確認することから始めざるをえませんでした。以後43年、と言っても実際に手を汚して働いたのは30年たらずですが、史料を整理し閲覧できるようにすることに、あるいは《日本社会運動史料》など復刻の仕事に、かなりの時間をさいてきました。こうした大原社会問題研究所と私の関わりについては、きょうお配りいただいている回顧座談会の記録「大原

社会問題研究所との43年間」で詳しく話しておりますので、今日は、大原研究所が所蔵している近代日本関係史料の内容についてご説明すると同時に、インターネットを介してすすめている史料の公開、大原デジタルライブラリーの現状と将来展望についてお話ししたいと思います。お配りしましたレジュメに沿って、まず大原社会問題研究所そのものについて簡単にお話しすることから始めます。

大原研究所は、1919(大正8)年に大原孫三郎さんが私費で大阪・天王寺に設立した民間の研究所です。設立から約20年間に大原さんが研究所のために支出した金は約185万円です。いまのお金でどれほどになるのかはよくわかりませんが、最低でも200億にはなるだろうと思います。最盛期の年間経常経費として彼が出しているのが15万円ぐらいでしょうか。研究員、職員あわせて40数人ですから、かなり大きな研究所でした。孫三郎さんが研究所に期待していたのは、さまざまな社会問題をどうやって解決するかという具体策の研究だったと思われる。彼は石井十次がやっていた岡山孤児院の経営も引きついでいたのですが、その救済事業が必ずしもうまくいかない。どうしたら本当に社会から貧乏を根絶できるかということが彼の根本関心で、それについての具体的な対策をうちだすような研究を期待していたのではないかと思います。しかし、所長に選ばれた高野岩三郎さんは学術研究を主とする高等研究所を志向しました。その傾向に拍車をかけたのは、森戸事件でこれを機に東京大学経済学部の革新的な若手スタッフが一斉に大学を辞め大原研究所に入ったことでした。森戸辰男さんご本人をはじめ、櫛田民蔵、権田保之助、細川嘉六といった人びとが東大をやめて大原社研の専任研究員になりました。林要、丸岡重堯、河西太郎、宇野弘蔵といった初期新人会の会員を中心とする若い研究者も助手として参加しました。大内兵衛さんもフルタイムではありませんけれども、大原に力を入れました。このように進歩的な研究者が大原研究所に集まって、大学でやろうとしていた研究をすすめました。当然のことながら、大原孫三郎さんと考えていた方向とはかなり違いました。ただ、大原さんはお金は出しましたが、口は出さないというポリシーを持っておられ、運営は高野岩三郎に任せて、実際の研究所の活動には口を差し挟みませんでした。

高等学術研究所であると同時に、研究所は内外の図書資料を集め、それを一般に公開をすることにも力を入れました。大原社研が所蔵する外国の図書については、クーゲルマンへ献呈したマルクスの署名入りの『資本論』初版をはじめとする数々の稀覯書のことがよく知られています。たしかに外国書のコレクションも貴重な内容のものではありますが、他には残されていないという意味で大きな価値があるのは、日本の社会運動関係の諸史料、つまりビラやポスター、あるいは諸団体の機関紙誌などだと思います。こうした資料収集を専門に取り組んでいたのが資料室で、1923年に設置されています。当時、大学や他の研究機関で、図書室のほかに資料室をもっていたところはほとんどないと思います。資料室の第一の目的は『日本労働年鑑』の材料集めでしたが、同時に、日本の社会運動、労働運動に関する貴重な記録の収集・保存にも力を入れました。特に資料室が意識的にテーマを決めて史料を収集し、保存しようとした企てとして注目されるのは、米騒動関係史料の収集です。まだコピー機などない時代ですから、地方紙もふくめ全国の新聞や雑誌などから関連記事を原稿用紙に筆写して史料を記録しています。この史料を使って米騒動の研

究をやられた京大人文研の方々はこの「細川史料」と呼んで、細川嘉六さん個人の功績にしていますが、この史料収集は、大原社研がその資料室を中心に組織的に取り組んだ仕事です。この史料収集には資料室のスタッフだけでなく、外部の方にもいろいろ仕事を委嘱しています。たとえば布施辰治事務所には裁判記録の収集を依頼しています。この史料収集を企画し、その中心になった細川嘉六氏あたりが、運動を援助することを考えて人を選ばれたのかもしれませんが、鍋山貞親夫人、山辺健太郎氏のお姉さんなど治安維持法違反事件の被告家族に筆耕を依頼しています。他にもこの史料収集に参加された方は木下半治、小岩井浄、浅野晃といった左翼の運動関係者が大勢含まれています。また、ちょうど郡役所が廃止されたばかりの時点で、各地の郡役所が保管していた史料を集めています。そのなかには後の東大総長の南原繁さんが大学を出たばかりで郡長をしていた富山県射水郡郡役所の史料などもあります。こういう話を始めると、きりがありませんが、この資料室の主任・後藤貞治のことだけは、ひとこと申し述べておきたいと思います。

この資料室の設置を誰が発意したかは分かっておりません。おそらく高野岩三郎さん、あるいは森戸辰男さんではないかと思えます。ただ実際に運営の中心になったのは、後藤貞治という東亜同文書院を出た男です。彼を中心にした資料室のスタッフは、第1回普選の時などには電柱からポスターを剥がしてきて保存しています。なかには新聞紙に赤インクと墨だけの選挙ポスターもあります。その時点ではほとんど紙屑同然なものに価値を見出して収集し保存したその眼力を、僕は高く評価しています。

昭和12年に大原さんからの援助が打ち切られ、研究所は東京に移ります。その時に、図書の一部は大阪府に譲渡されましたが、原史料類はきちんと梱包されて東京に運ばれました。そのまま土蔵に放り込まれ、ずっと戦後まで眠っていたものですから、年数がたっていたわりには保存状態はよかったと思えます。

つぎに、いま大原研究所が持っている「近代日本史料」といえるものに何があり、どうやって集めたかをごく簡単にお話ししたいと思います。より詳しいことは法政大学大原社会問題研究所のホームページや私の個人サイト『二村一夫著作集』を見てくださいれば分かります。

大原社会問題研究所の史料の骨格となっているのは、毎年『日本労働年鑑』を書くために集めた資料です。たとえば労働組合や社会運動団体の機関紙誌、大会資料などが網羅的・系統的に集められています。戦前の機関紙誌のなかにはいわゆる「3号雑誌」が少なくありません。出ては消え、できては消えというわけですが、毎年、労働年鑑を書いていたからこそ、洩らすことなく集められたわけです。一度寄贈依頼を出して、あとは放っておくといったやり方では集まらない。たえず新しい動きに注目していたからこそできたことです。

それから、これは運動を支援するという意味合いが強かったと推測されますが、労働組合・無産政党・農民組合などの本部史料がそっくり入っています。これはなぜかと言いますと、研究所はビラでもなんでも紙1枚を5銭で買い取っていたんです。裁判記録であろうがビラであろうが1枚5銭で買い取るものですから、労働組合が選挙などの際にまとまった資金が必要になると、本部にある史料を大原に持ち込んで、何十円というお金に換え

るというやり方をしたわけです。もちろん個人でも、持ち込んだ方がいらっしやいます。どなたから幾らで買い取ったかということは、「庶務日誌」や「資料室日誌」などに記録されていますからわかります。どの組合や政党にどれほど支払ったかについて、おおよそのことは、私が昔書いた「大原社会問題研究所の戦前史料について」という論稿にまとめてあります。これを研究所に持ち込んだのは、浅沼稻次郎、河野密といった人びとです。森戸辰男さん、後藤貞治さんなどが、日本労農党系に近い立場でしたから、中間派の人たちにとっては頼みやすかったんでしょうね。量的な違いはありますが、それ以外の系列の人びとも史料を持ち込んでいます。持ち込んだ人たちは、運動資金を得るだけでなく、大原社研に渡せば、自分たちの運動の記録が残るということも考えていたのでしょう。したがって戦前の主要な労働組合・農民組合・無産政党の本部史料、とくに「中間派」のものは網羅的といってよいほど残っています。

左翼の方でも、たとえば湊七良、山辺健太郎といった個人が評議会関係の史料を持ち込んで売っています。あるいは、明治末に起きた「赤旗事件」の赤旗と称して、実際は事件に関わったわけではない赤旗を売り込んだ方もいます。大原研究所は長い間それを貴重品扱いにして、特製の桐箱までつくって保管していたんですが、当時の裁判記録を調べたら、赤旗事件の赤旗は「無政府共産」と書いてあった。ところが研究所にある赤旗は、「社会主義」なのです。腰巻きに使われたような赤いネルの生地に絆創膏を貼りつけて字を書くというのは同じでしょうから、まったくの偽物というわけではなく、その場にあったものには相違ないと思いますが、事件の原因となった旗ではない。いずれにせよ、戦前は、運動の規模が小さかった反面、大原研究所は財政的に豊かだったので、貴重な記録を包括的に集めることができたのでした。

それから、もう1つ注目される史料は裁判記録で、予審調書を中心にかなりの量が残っています。詳しいことは、私が以前日弁連の機関誌『自由と正義』に「大原社会問題研究所の裁判記録について」という小文を書いておりますので、それをご覧いただきたいと思います。

伊藤 それは二村さんがお書きになっている？

二村 ええ、私個人が書いて、私のホームページでも読むことができますから、どうぞ関心のある方はご覧いただければと思います。

予審調書は裁判での証拠になりますから被告側も謄写することができたわけですが、謄写には当然のことながら費用がかかりました。特に治安維持法違反事件のように調書が大勢の弁護士や被告人などに配らなければならない場合は、その謄写費用だけでも相当な負担でした。そこで弁護士側が、あらかじめ大原研究所や東大の経済学部図書室など、何箇所かに売り込んで、それで謄写費用を捻出していました。それ以外の事件でも、弁護士から寄贈されたり、1枚5銭で買い上げる形で、かなりの量を入手しています。

戦後も、1960年代まではオフィスも書庫も小さかったのでどうにもなりませんでしたが。しかしあれこれ手を尽くして、大学の空き教室を借りたり、だいぶ苦勞してスペースを拡張し、新たな史料の寄贈を受けたり、整理をすすめることができました。さらに1985年には、高尾山の麓といてもいいほど辺鄙な場所に移りましたので、ようやく広い

事務所や書庫が手に入りました。それ以降は史料寄贈の申し入れがあれば引き受けるといった感じで、次々に史料を受け入れました。もっとも人手がないので、「整理は無理ですが、とりあえず散逸だけはしません」という姿勢で集めたものが少なくないのですが。いまになると、「なんでこんなものまで集めたのか」とあちこちから批判されていますが、その責任は私にあります。分量からすると、戦後収集分のほうが戦前の10倍はあるのではないかと思います。

それでは、戦後収集史料のうち「近代日本史料」と言うべきものに何があるのか申し上げます。すでにお話ししましたが、労働組合や社会運動団体の機関紙誌、大会議案書等はかなり揃っています。これも『日本労働年鑑』を編集するために集めたものです。また労働組合などの本部所蔵史料もいろいろ入手しています。ただ、戦前と違って戦後の大原研究所は貧乏ですから、史料を手に入れるのにお金はほとんど出していません。逆に整理費をつけて史料をもらうことはありますが。労働組合の側も、自分たちの運動の記録を保存しておきたいけれども、自分たちのオフィスにはそれだけの収納スペースがない。あるいは炭労、国労のように、組織自体がなくなってしまう場合に、史料をどうするかという問題が起こります。そういった史料を大原研究所は引き受けております。戦後最初にまとめて引き受けたのは、産別会議本部の史料です。そのほか総評や同盟、東芝労連や全造船三菱労組、国労など本部旧蔵史料が1つの系列です。

それから、元組合書記、あるいは委員長など個人の所蔵史料が寄贈される例も少なくありません。ちょっと話は逸れますが、その昔UCLAのアジア系マイノリティのアーカイブに行った時に聞いた話ですが、日本人は日記や写真、手紙など個人的記録を大事にする傾向があるということです。中国系アメリカ人の場合は日本人より半世紀以上前からしかも大勢が渡米し、各地にチャイナタウンまでできていたのに、意外に史料が集まらない。それに対し日系人は、第二次大戦の時には西海岸にいた人びとはリロケーションキャンプに収容されました。それも1週間程度の猶予期間で強制移住させられ、時間もなく、運べる荷物も限られていた状況だったのに、予想外に記録が残っていると聞きました。日本の組織は、史料の保存の面ではかなりいい加減ですが、個人は日記や写真などを大事に保存する。欧米ですと、組合の会議の議事録や書簡類などが、公的な記録がきちんと作成され、組合のアーカイブにきちんと保存されている。それに比べると日本の労働組合はだめでして、事務局長が替わったり、事務所を移転する時などには、それまで保存していた文書を廃棄してしまう。そういう話を聞いた時は、私どもはできるだけ行ってもらうようにしています。総評や同盟関係の文書は、主としてそういう時に貰ったものです。ただ、戦前に比べ、本部に残っている史料は印刷物が多く、肉筆の貴重な記録は意外に少ない。もちろん印刷やコピーが簡単にできるようになったからですが、肉筆のものは、役員経験者や書記が個人で保存している場合が多いと思います。そうした個人的なメモやノートのほうに、重要な事実が記録されているのですが、おそらく、これからも、まだそうした記録を発掘することは可能だと思います。その意味で「近代日本史料」はいたるところに残っており、それだけに、その収集保存の作業は大変です。とりあえず私どもは、そのままにしておけば捨てられてしまう史料を、何とか散逸させたくないと考えて仕事をしてきました。それ

も、大原社研だけではとても無理ですから、「社会労働関係資料センター連絡協議会」という組織をつくりお互いに情報を交換して史料の保存につとめています。

話がだいぶあちこちに飛び、横道にそれましたが、今度は戦後の裁判記録についてお話ししておきたいと思います。戦前とはまるで違う形ですが、戦後も裁判記録をかなり入手してきました。そのきっかけとなったのは、松川裁判の記録です。松川事件そのものの裁判の記録だけでなく、無罪が確定したあと、国家賠償を要求する運動がありました。その国家賠償の裁判が全部終わった時に、松川運動の資料をどうするかが問題になり、最終的には何人かの弁護士に一任されました。その弁護士の方々が東大社研や大原社研など数箇所「こういう資料があるが、これを引き取る意向があるか」と照会してきたわけです。どの機関も前向きな回答だったようですが、最終的に大原研究所に決まりました。その理由は大原社研が「利用者の資格を問わず、誰にでも見せる」点が評価されたようです。この松川事件の記録の受け入れがきっかけとなって、その後もメーデー事件、大須事件、吹田事件、辰野事件、平事件といった1950年代の主要な公安事件の裁判関係の記録がつぎつぎと入ってきました。なかには、まだ未整理ですが、白鳥事件の村上被告が獄中にある間に、全国から寄せられた手紙、数千通といったものもあります。

戦後の史料は原則的に無償で寄贈を受けていると申しましたが、例外的にお金を出して買ったものに協調会史料があります。実は、協調会附属図書館の蔵書もいまは大原研究所の管理下にあり、本来の大原研究所の蔵書と同じ書庫で保管され、同時に閲覧できるようになっていますが、これと「旧協調会史料」はまったく別系列のものです。協調会附属図書館の本は、戦後になって協調会の資産を継承した中央労働学園に帰属しました。1952年に、この中央労働学園大学が法政大学と合併し、法政大学社会学部になりました。その時に、旧協調会の附属図書館の蔵書は全部法政大学図書館に移管され「協調会文庫」となったわけです。しかし、大学がなくなっても、学校法人中央労働学園は労働者教育の学校として存続していました。そこに、協調会労働課などが業務上で作成したり集めていた文書は残っていたのです。ご承知のように協調会は半官半民の団体で、内務省と密接な関係がありましたから、その史料のなかには、各府県警察部が内務大臣はじめ各府県警察部に送ったマル秘情報も含まれています。なかでも労働組合や無産政党の大会に警察が速記者をいれてとらせた速記録などは近代日本史料としてきわめて貴重な記録です。これを保管していた中央労働学園は閲覧室もなく、管理にも問題がありました。閲覧希望者には見せていたのですが、コピー機などはなかった時代だったこともあり、自分が使う箇所だけ切り抜いてしまったやつがありました。川崎の労働運動関係の箇所だけが切り抜かれていますから、誰がやったか推測はつくのですが。それと、この史料を保管していた建物は木造でしたから、もしも火事にでもなったらと心配でもありました。そうしたこともあって、1975年に大原社会問題研究所が買い取りました。大原所蔵の戦前史料のなかでも、いちばん利用度の高いものの1つです。

伊藤 これはどこから買ったんですか。

二村 学校法人中央労働学園からです。協調会は社会政策学院という学校を運営していましたが、そのスタッフを中心に、戦後つくられた学校法人です。

その他で戦後に入手した大きなコレクションは向坂逸郎さんの蔵書と資料です。1985年1月に87歳でお亡くなりになったのですが、そのすぐあとにお話がありいただくことになりました。向坂さんはたいへんな収書家である上に雑誌や資料などを捨てるということはなさらなかった方ですから、その蔵書量は約7万冊という個人文庫としては最大級のものであります。そのなかには、堺利彦旧蔵の図書史料も含まれています。遺族から向坂さんが買い取られたものです。ただ問題は、向坂さんが自分で集めた本と、堺利彦旧蔵書が区別されずに保管されていたため、どれが堺利彦旧蔵で、どれが向坂さんが独自に集めたものかが分からない。「大逆文庫」という堺の蔵書印のあるものははっきりしているのですが。

伊藤 これは図書だけじゃなくて、文書もあるわけですか。

二村 堺利彦のノートがかなりあります。勉強したノート、『共産党宣言』など翻訳ノート、そのほか日本社会主義同盟の名簿といった貴重な記録も含まれています。また荒畑寒村が大阪で出していた『日本労働新聞』などは、おそらく堺利彦旧蔵だろうと推測されます。堺さんの蔵書を向坂さんが引き取った時に、古書店に評価させるために作ったリストがあるはずだとのことでしたが、今のところまだ見つかっていません。向坂文庫については、5冊の目録が出ていますので、詳しくはそれをご参照ください。

そのほか、個人の旧蔵図書・史料を一括していただいたものは個人文庫として保存してありますが、そのなかでも近代日本史料として重要なものに鈴木茂三郎文庫があります。鈴木さんが集められた図書のほうは生前に、「社会文庫」として近代文学館に寄贈されたんですが、そのあと、ご子息で法政大学教授の鈴木徹三さんの手元に個人的な文書や史料の類が残されていました。鈴木徹三さんは経済政策がご専門ですが、晩年は鈴木茂三郎伝の執筆に専念されました。その時に参考資料として集められたものも含めて「鈴木茂三郎文庫」として、大原研究所に寄贈してくださいました。あと社会運動関係者個人の蔵書・史料はいろんな形で入っておりますが、分量や内容もさまざまです。人名だけご紹介しておけば、赤松克麿、杉山元治郎、志賀義雄、春日庄次郎、下坂正英といった方々です。

伊藤 高瀬さんのものもそうですか。

二村 高瀬清さんのものは本が大部分です。あとは研究所の関係者のものがあります。

伊藤 これも図書ですか。

二村 研究所関係者のものは図書よりは手紙や日記など、個人的な史料のほうが主です。

最後に大原デジタルライブラリーについてご紹介させていただきます。私個人も、皆さまと同様に、史料の保存、公開に関心をもってきました。社会・労働運動という限られた分野についてだけですが、史料集を作成するといったことにも長年取り組んできた次第です。はじめは謄写版のタイプ印刷で『日本労働組合評議会資料』などを出していたんですが、タイプ印刷では校正がきちんとできませんし、収録できる分量にも限りがあります。そこで、1969年に研究所が創立60周年を迎えたのを機に復刻シリーズ『日本社会運動史料』を法政大学出版局から出し始めました。第1回配本が初期新人会の機関誌でした。その後二十数年の間に208冊出しましたが、次第に商業的には成り立たない状態になってしまいました。もともと利用者が限られていて、多数の方に購入してもらえそうもないものですから、当然部数は限られ、定価は高くなる。とても一般の利用者には手が届かない

ものになってしまう。さらにさまざまな分野で復刻本が出るようになると、頼みの図書館でも、一部の大学図書館以外は買って貰えない。となると、何らかの出版補助がない限り、とても商業ベースでは続けられなくなってしまったのです。

そこで、どうしたら所蔵史料を多くの方々に利用していただけるかを考えた末、やはりインターネットしかないと思うようになりました。史料を電子情報、デジタル情報として蓄積し、それをインターネットを介して見られるようにすれば、それほどコストはかからない。今は無理でも近い将来、技術的にも費用の面でも可能になると思ったんです。1990年代半ばのことです。もちろんすぐに実用になるとは考えていませんでした。初期のインターネットは転送速度が遅く、ひとつのファイルを見るだけでも長い時間がかかりました。しかし、将来的には必ず速くなるというふうにしたものですから、それに向けて準備を進めてきました。最近ようやくブロードバンドが普及してきましたから、技術的には実用段階に近づきつつあると思っています。

実は、私が定年退職する前の年1年間は、インターネット三昧といってよいほどで、大原研究所のウェブサイトをつくりあげることに専念していました。なかでも「大原デジタルライブラリー」が目玉で、最終的には所蔵史料をすべてオンラインで利用できることを目指すと宣言してしまいました。このデジタルライブラリー制作の経緯は、アカデミック・リソース・ガイドという学術系のオンライン雑誌に書きましたので、詳しくはそれを読んでいただきたいと思います。

1999年に私が定年で辞めたあとを考え、野村一夫さんという、漢字でも、仮名でも、ローマ字でも、なんでも私と1字違いの方をリクルートしました。野村さんは「ソキウス」というインターネット界では著名な社会学のサイトを運営している人物です。彼はインターネットに関しては、私などよりはるかに高度な知識と技術をもっているので、彼のプロデュースのもと、大原のサイトはその後急速に充実しつつあります。

今日は、プロジェクターを用意していただいておりますので、実際に法政大学大原社会問題研究所のホームページ (<http://oisr.org>) を実際に見ながら、現状と将来の見通しについてご説明させていただくことにします。これまでお話ししてきた所蔵史料の内容も、この大原のホームページでより詳しいことが分かるようになっていきます。ちょっと暗くしていただいたほうがいいのか。

これが大原研究所のサイトとして、デジタルライブラリー (<http://oisr.org/dglb/>) はその一部です。その柱になっているのは各種のデータベースです。文献データベースで利用度が高いのは論文データベースで、2002年4月現在17万1千余件が採録されています。これでキーワードを入れて、たとえば私の名前を入れて、検索をかけますと、私の書いたものがこういう形で出てきます。私自身が書いたものだけでなく、私の本に対する書評も出てきます。この論文データベースは雑誌論文だけでなく、複数の著者が執筆している図書中の論文を採録しています。もっとも、社会労働関係の本だけですけれども。おそらくこういうレベルまで採録しているデータベースは他にはあまりないと思います。書評のものかなり力を入れています。このデータベースの基礎になっているのは、活字メディアで1960年以降、毎月発表してきた「社会労働関係文献月録」です。和書、洋書は研究所自

身の蔵書で整理済みのものです。協調会文庫や向坂文庫の本もこれで検索できます。そのほか画像データベース、書簡データベース、あるいは復刻本で筆者名の分かっている論文を収録した《日本社会運動史料データベース》などがあります。ただ、初めての方では、どのように利用したらよいか分からないという声もありましたので、マルチメディアデータベースと称するものをつくっております。さきほどお話ししましたように、浅沼稻次郎はさまざまな史料を大原研究所に持ち込んでいます。このマルチメディアデータベースで浅沼稻次郎のところをクリックすると、こういう画面が出てきます。出力件数は5件じゃちょっと無理なので件数を増やします。100件として、画像データベースで検索しますと、小さな画像、いわゆるサムネイルの絵が出てきます。画像データなので、ちょっと時間がかかるかもしれません。こういうふうに出てきましたら、この「画像」とあるところをクリックすると、もっと大きい絵になります。

伊藤 これはポスターですか。

二村 ポスターです。今のところ、画像データベースは、ほとんどポスターデータベースと申し上げていい状態です。戦前について約3000点、戦後については、1400点のポスターがデータベース化されています。こういうふうに、ポスターそのものが133件、小さい画像、いわゆるサムネイル付きで出てきます。もっとも、113点すべてが浅沼中心のポスターというわけではなく、彼がほかの人の演説会などに応援弁士として出ている場合も含まれています。つぎに書簡データベースをクリックしますと、大原社研にある浅沼の手紙が検索できます。もっとも、今のところ実際に画像データが入っているのは、1人1点に限っています。もっとも浅沼稻次郎が出した手紙や葉書だけでなく、彼に宛てた書簡も出てきますが、いずれこれは画像を入れますので、画像データさえ増やしていけば、書簡全部をインターネット上で読むことができるシステムにはなっているわけです。手紙ですから、プライバシーに関わる問題をどうするかという難しい問題もありますが、つぎの和書は大原の蔵書のデータベースで、浅沼稻次郎に関する本が、こういう形で出てまいります。

伊藤 書いた本や書かれた本ですか。

二村 彼の著書と、彼の評伝など彼について書かれた本の両方です。要するに、浅沼稻次郎を件名として検索した形です。たとえば、最後の三宅正一さんの本は、副表題に、「賀川豊彦・麻生久・浅沼稻次郎の軌跡」と入っているので、浅沼の名で出てくるわけです。「労農青年に訴ふ」は共著です。マルチメディアデータベースから検索できるデータベースのもう一つ《日本社会運動史料索引》は、さきほどお話しした復刻シリーズ『日本社会運動史料』と『戦後社会運動資料』の索引をデータベース化しているものです。これでは浅沼が早稲田大学を中心とした建設者同盟の機関誌『建設者』や『青年運動』に書いている論文などの掲載号がわかります。また戦後の雑誌『社会思潮』に書いている号数が出てきます。マルチメディアデータベースに入れてあるほかの人についても同じように検索することができます。たとえば、柳瀬正夢のところ、ポスターデータベースを検索すると、ここでは柳瀬が描いたポスターが出てきます。これなんかは割合有名なポスターの1つで、大山郁夫の選挙ポスターです。四国で彼が三土忠造と争った時のポスターです。三土の名

はむかでや蛙などを使い、農民や大山の字に拳骨がついていたり、草鞋を履いた足があったりします。実は、このマルチメディアデータベースは、いちばん先につくりましたので、その後他のデータベースが出てきましたし、利用者も慣れてきましたから、だんだん実用性という点では意味が薄れてきています。

大原社研のホームページのなかでも、ポスター関係のものはなかなかの人気のようで、多くの方が見に来られます。たとえば画像データベースで「大阪」というキーワードを入れていただければ、大阪関係のポスターを見ることができます。あるいは選挙といえれば選挙ポスターを見ることができます。それから、ややお遊び的ですが、一般の方にも見ていただけるのはこちらのスライドショーで、これはわかりやすいと思います。どれがよろしいでしょうか。たとえば産業福利協会という労働安全促進団体のところを見ましょう。これは放っておいても、自然に絵が変わって行きます。ほかのことをやりながら、ときどき眺めるといいというぐらいの感じでいきます。これでは待ちきれないという方は **Next** を次々に押し続けていただきましたら移っていきます。もう 1 回みただければ、**Previous** というほうを押せば、前のポスターをみることができます。

伊藤 このなかに、この画像の著作権とありますけれども、これはどういう。

二村 電子化著作権というような意味合いです。ポスターを収集保管し、それをもとにデジタル化したわけですから。

大原社会問題研究所のホームページでは戦前のポスター約 3000 点ほどを見ることができます。これは先ほどご説明したマルチメディアデータベース、画像データベースを使わなくても、《OISR.ORG 20 世紀ポスター展》から入ることもできます。これは分類してありますから、関心のある分野、たとえばプロレタリア演劇をクリックしておけば、8 秒毎に画面が変わっていきます。こんな風に見始めるときりがないので、ポスターはこのくらいにしましょう。

デジタルライブラリーのなかでも、以上のような展示系列は、一般の方々には人気があるのですが、研究者にとっては、大原社研にどのような史料があるかを探ることの方が重要でしょう。実は、こちらはまだデータベース化までは進んでいませんが、目録として使えるようになっていきます。たとえば、さきほどお話ししました協調会史料ですと、《協調会史料インデックス》の名で、このようになっています。これは協調会の史料の多くはファイルとして製本され背文字が入っていますので、それだけは分かるようになっています。実はこれはすでにマイクロフィルムになっており、市販されているのですが、そのマイクロフィルムから画像データをデジタル化しファイルがすでにできています。まだ、公開はしていませんが、試作中のものちょっとだけ皆さまにご覧いただきましょう。これは総同盟 14 年全国大会の議事速記録です。総同盟が分裂し、評議会が左翼と右翼が分かれる寸前の大会の速記録です。モデム経由のようで、ちょっと時間がかかりますが、ブロードバンドですと実用的な速度です。前にこのプロジェクトでの報告書のなかで、大原のものを検討くださって、「詳しく過ぎてとても実用にならん」とおっしゃっていたのはこういうことかもしれません。ブロードバンドでしたら、十分実用レベルなのですがここでは駄目です。いずれにせよ、現在の予定では、来年の 4 月には、いま「デジタルライブラリー」

と称しているものを3つに分けて、史料を閲覧できる「デジタルアーカイブ」と、展示系の「デジタルミュージアム」、それに図書や論文のデータベースなどの「デジタルライブラリー」として、もっと使いやすい形にすることになっています。

《協調会史料インデックス》のほかに、デジタルアーカイブの内容になるものとしては、《戦前期原資料インデックス》《産別会議インデックス》などがあります。《戦前期原資料インデックス》は戦前期の原資料の検索カードをデータベース化したものです。全貌を見るにはリストアップ版のほうがわかりやすいと思いますので、こちらをご覧くださいませ。戦前期の史料、さきほどお話ししました労働組合や農民組合やいろんな団体の本部資料にどのようなものがあるかということは、これで簡単に分かります。データベースの方は、件名に年次を入れたり、地域名を入れたり、あるいは争議などを入れて、検索できるわけです。リストアップ版は、文書の発行主体が一覧表になっており、「総同盟」をチェックして検索をすると、こういう形で、今度は速いですね。385件のファイルがあるということがわかります。これも出てくる情報は、ファイルの背文字だけですが、どのような史料があるかということ、研究所にいらっしゃる前に確認することができます。

今後、実際に史料をオンラインで利用できるようにするには、まだかなり時間がかかると思いますが、協調会史料については、先ほども申しましたように、近い将来利用できるようになります。どのようなファイルにするか、GIFファイルか、JPEGか、あるいはTIFFかといったことは検討中ですが、なるべく圧縮率が高く、しかし解像度はなるべく高く、モニターで読むことができるものを使うことになります。

伊藤 請求番号の「A-1」というのは？

二村 閲覧のために付けている番号で、請求記号だけで、そのファイルがどこにあるかがわかります。保管してある部屋と棚の位置です。

伊藤 総同盟のこれが「A-1」ですから、これがいちばん最初という意味ですか。

二村 そういう意味です。総同盟がA、評議会がB、全協がCというように、順番についています。

伊藤 並んでいる？

二村 はい、そうです。要するに、さっきのリストアップ版の順序でやっています。ですから、これで評議会、全共とか、労働組合会議、農民組合、あるいは政党でこういうものがあるという形です。たとえば水平運動というふうにして検索すれば、水平運動のは45、5つのファイルがあると。それで、水平社の大会であるとか、こういう形で出てきます。ですから、言ってしまうと、大原にある原史料のカードをインターネットで検索している状態だというふうにご理解いただければいいと思います。

伊藤 これは個人はないんですか。

二村 個人は、文書の作成者が明記されているものや選挙関係なら、《戦前期原資料インデックス》に名前を入れれば出てきます。しかし量的にはごく限られています。ほとんどが労働組合の本部など機関から出た記録ですから。もちろんこのなかに含まれている手紙などは、さきほどご説明した《書簡のデータベース》で検索することができるようにしてあります。試してみましよう、誰がいいでしょうか。

伊藤 三輪寿壮なんかは？

二村 48件ですね。これは三輪寿壮が書いたものと彼に宛てた手紙というものを併せての件数です。

伊藤 ということは、三輪寿壮のところから出たということですか。

二村 差出人というよりは三輪寿壮に宛てたものです。

伊藤 ですから、三輪家から出たということですか。

二村 いやいや、ほとんど組合の史料のなかに入っていたものです。戦前期の史料は、ほとんど団体もっていた史料で、個人の家から出たものは研究所関係者などごく一部です。個人が本部の組合役員などに宛てて出した手紙や葉書が入っているのです。画像データでは封筒も入れていますから、宛先の住所もわかります。

伊藤 たとえば25番の「原稿用紙3枚」というのは、筆写したものという意味ですか。

二村 いや、そうじゃありません。便せんの代わりに原稿用紙を使っているんです。この書簡データベースに入っているものは筆写したりコピーではなく、全部現物です。

伊藤 しかし、これは便利だな。

二村 画像として見ることができるのはまだ少ないので、申しわけないのですが。この手紙は三輪寿壮さんの手ですね。他の方の手紙を見るのは、時間がかかりそうなのでやめておきます。いずれにせよ、転送速度が速いブロードバンドならまったく問題なく、すぐ見ることができますが。

今はまだ、何時から公開できるか見通しはたっていませんが、たとえば《日本社会運動史料》の一部は、すでにデジタル画像にしてあります。たとえば新人会機の機関誌の『デモクラシイ』などは、出版社との問題が解決すれば、すぐにも読むことができるようになっています。ですから《日本社会運動史料索引》を使って、『デモクラシイ』に収録されている論文にたどりつけば、そこから画像データを取り出して読むことができるわけです。

伊藤 だけど、これを復刻したものが。

二村 はい。その本屋との関係もありますし。

伊藤 もし残っていたとしたら。

二村 その売れ残りの問題があるんです。交渉はすすめています、出版社によって対応が違います。『日本労働年鑑』なんかは、まだ一部が売れ残っている本でも、オンラインで公表することを認めてくれていますので、htmlファイルで読むことができるようになっています。これはPDFじゃありませんから、転送速度が遅い環境でも実用になります。検索エンジンの「Google」などで検索してすぐ使えるように、小さなファイルに区切っていますし。たとえば『太平洋戦争下の労働者状態』はこういう形になっています。1つ1つの節が1ファイルになっています。

伊藤 それは画像になっているんですか。

二村 画像じゃありませんで、基本はテキストファイルです。もちろんモニタの画面を印刷することはできますし、PDFファイルに変換することもできますが。労働年鑑20冊分ぐらいがいま全部テキスト化されていて、これは全文検索が効きますから、かなりの程度実用になります。これは私どもに著作権がある出版物ですから、比較的問題が少ない

わけです。

だいぶ長い間お話ししましたので、あとはご質問に応じてお答えするというところでよろしいかと思います。何かございましたらどうぞ。

伊藤 さきほど「著作権について」というところがあったように思いますが、あれはどういうことですか。

二村 要するに、所蔵史料をデジタル化したものについての著作権です。この画像などホームページにあるデータをお使いになる時に、著作権法を守ってくれというふうに言っているわけです。要するに、デジタル情報を個人が私的に使う場合には構わない。プリントアウト、ダウンロードなどは、個人が調査、研究、学習を目的として私的に利用する場合に限るといいます。これは著作権法の規定で、それについて言っているだけです。出版物に使いたいといった場合は、願い書を出して承認した上でということになっています。

それから、大原研究所でまだ他の研究機関ではあまりやっていないことは、『大原社会問題研究所雑誌』を PDF ファイルで公開していることです。これは最近号ですが、目次だけでまだ出ていません。その前の号はすでに PDF 化してオンラインで見ることができます。1998年以降の大原雑誌は、全部このようにインターネットでみていただくことができます。皆さまにお配りいただいている、「大原研究所との43年間」もここからダウンロードして、プリントアウトしていただいたものです。

伊藤 これは大原じゃなくて、あなたのホームページですか。

二村 大原のサーバーの中にあるんですが、これは『二村一夫著作集』と称する私のホームページからも読むことができるようにしてあります。それに、今日のために、先ほどお話しした「法政大学大原社会問題研究所所蔵の裁判記録について」という日弁連の機関誌『正義と自由』に載った文章を私のサイトにアップしました。これを読んでいただければ、大原研究所にどのような裁判記録があり、どのように集まったかということがお分かりいただけます。

伊藤 これは戦前も戦後もですか。

二村 はい。戦前だけでなく、戦後の裁判記録についても書いています。そのほか、研究所の歴史なども私のサイトで読んでいただけます。URLは <http://oisr.org/nk/> です。

その他に、高野房太郎の伝記を私個人のサイトで書いております。これが35回目です。ほとんど趣味みたいなもので、これで2年以上かけて書いています。関心のある方はご一読いただけると幸いです。

伊藤 ありがとうございます。一応打ち出したものをざっと拝見してすごいことだなとは思っていましたが、大変なお仕事を、本当にちょっとびっくりしました。いろいろ皆さんもお聞きになりたいことがたくさんあると思いますが、戦前、一度大原社研が財政的に苦しくなった時期がございますよね。

二村 はい。

伊藤 あれはどうやって凌いできたんですかね。

二村 基本的には、大阪にありました天王寺の土地と建物、それから、蔵書7万冊を大阪府に売却して、それを基金にして、東京に移転して、規模を縮小、つまり人を減らして維

持しました。あと、戦時中に一時期鮎川義介さんの義済会というところからお金をもらっていますが、基本的には大原さんからのいわば手切れ金の果実で文字通り財団法人として生き延びていたということです。ですから、最盛期の10分の1くらいのスタッフでやっています。高野岩三郎、森戸辰男、久留間鮫造、権田保之助くらいです。あと、1人2人若い研究員がいて、職員が2～3人という形でつないでいたわけです。戦後はとてもそれではインフレでやっていけなくなりまして、法政大学に入ったということになります。

伊藤 いまは大原は法政大学の付属。

二村 法政大学の付置研究所です。一時期は学校法人法政大学とは別の財団法人にしてみました。それは森戸さんが文部大臣だったりと関係があると思うのですが、法政大学には金を出せないけど、財団法人なら金を出せるというので、財団法人法政大学大原社会問題研究所にしたんだと思います。しかし、その後、私学助成が実施されるようになりましたら、学校法人法政大学には助成が来るのに、財団法人大原社会問題研究所では助成が出ない。何とかしろとあちこちから言われまして、いろいろ考え、トンネル機関でもないのですが、大学の付置研究所として、社会労働問題研究センターという組織を作り、私どもはそこから、つまり大学から給料をもらうという形にした時期もありますが、1985年に財団法人は解散し、法政大学と合併し、いまは完全に法政大学の一機関です。

伊藤 史料収集の現在の方針はどうか。

二村 私はもう退職しましたから、現在の方針について申し上げる立場にはありません。私が所長をやっていた時期の方針は、多摩キャンパスに移転した前後で、広い書庫もありましたから、積極受け入れ方針でした。もともと所長になる前から、いずれ図書館研究所関係の施設の建築が問題になることが分かっていたから、社会・労働関係の図書・資料なら積極的に受け入れるべきだと主張し、実行していました。つまり、書庫の広さの計算はもっている本の量で決まるという考えがあったものですから、どんどん寄贈を受けました。

伊藤 われわれがよく考えることですけど。

二村 ほとんど大原研究所の蔵書と重複するような労働省図書館の本や雑誌をもらったこともあります。整理を担当する職員からは「なんでこんなのをもらうか」と批判されましたが、労働省でさえ持ちこたえられないものを、大原社研が持っていることに意味があるんだと主張して、あちこちからもらい続けてきたんです。しかし、その方針はいまや破綻しています。

伊藤 もう満杯になったんですか。

二村 移転して十数年で満杯に近づいています。保存書庫を別につくるということは、前から大学の方針になってはいますが、なかなか実現しません。ですから、いまの研究所はかつてのような拡張方針は取れないので、重複している図書はどんどん処分して、受け入れは、ごく限定するようになっていると思います。

伊藤 リストに載ってないまだ未整理のものというのはある程度あるんでしょうか。

二村 あります。

伊藤 ある程度じゃなくて。

二村 かなりあります。なかでも、大原研究所の守備範囲を超えた分野の史料は整理がいつも後回しになって手つかずです。ベストの場所じゃないけど、散逸させるのはもったいないというだけで引き受けた史料もありますから。たとえば敗戦後の満州の日本人引き揚げ者団体の史料などはそうです。新橋に国際善隣協会という団体があり、そこが大量の史料を廃棄するという情報を大学時代の友人が聞きこんで「何とかならないか」と言ってきたものですから。「うちの守備範囲を超えるけど、とにかく預かろう」といって預かりました。引き揚げ者団体が向こうで出していた新聞のような、その分野に関心のある方にはかけがえのない史料が含まれています。あるいは教育大学がつくばに移転する時に、それに反対した人たちの運動の記録も、これは大原向きの史料じゃないけど、ともかく散逸しないために預かっておこうといった文書はいまだに未整理、手つかずです。

伊藤 この前、棚橋小虎の日記を僕のところにもらおうと言っていたら、家族のなかで意見が分かれて、結局大原に寄贈するという事になって。

二村 牛山敬二さんからそれについてご連絡をいただきました。

伊藤 それで、全部コピーだけを取らせてもらったんです。これはそちらは公開されているのかどうかはちょっとわかりませんので。

二村 これはまだ大原社研にはいただいてませんから、公開以前です。

伊藤 いただいてないんですか。

二村 リストだけはいただきましたが、現物はまだ来ていません。まもなく来るとは思いますが、ご遺族のあちこちに分かれて保管されているので、もうしばらくかかるようです。

伊藤 日記だけみたいですか。

二村 いえいえ、重複しそうな図書を除いて、すべてです。

小池 小池と申します。先日、大原社研から広島大学に電話がありまして、私は森戸文書研究会の代表をしているんですが、森戸辰男旧蔵の本を引き取ってくれというお話をいただきました。できれば、労働関係の本もたくさん送っているのですが、それも併せていただきたいというお話をしたところが、「いや、それはこちらが」というようなことで、文学関係のほうだけを送っていただきました。だから、結構そういう形で、労働関係という形で大原社研のほうは特化していくという方向性があるのでしょうか。

二村 社会労働関係で特化せざるを得ないということだと思います。森戸さんは日本女子大に婦人問題関係のものを寄贈されたり、あちこちに寄贈されています。そういうお考えの方の場合には、向き向きのところに収めるのがご本人の意思にも合うというような意味合いがあります。

小池 そうですね。それで、基本的な部分に関しては、広島大学が持っております。いまだ整理されていない史料はどんなものがあるのかを教えてください。たとえば大内兵衛関係文書などもまだあるのではと思いますが。

二村 大内兵衛さんの史料はあまり大した量はないんです。

小池 あれだけいろんなものを書かれているのですか。

二村 大原に入っているものはそれほど多くはありません。たぶんまだご自宅にあるんじゃないかと思います。記念品的なものはありますが。それと、大原の土蔵に残っていた、

たとえば獄中記のようなものはありますが、意外に少ないです。

小池 ではあの程度ということですか。

二村 実はきょう現物史料についてはインターネットでおみせしようと思っていたのですが、ちょっと無理のようですが、そのなかに、森戸さん関係のものも幾らかあるはずですよ。

小池 それから、櫛田民蔵の書簡集を前につくられましたですね。非常にいい書簡集ですよ。つくられる時に、元は誰が所蔵していたのかというのがあの書簡集には書いてないものですから。

二村 櫛田さんの手紙は久留間鮫造さん、森戸辰男さん宛のものがあります。量的には櫛田民蔵さんが書いたものより櫛田さんに宛てられた手紙のほうが多いと思います。とくに河上肇からの手紙はまとまっています。

小池 はい。森戸文書からも、櫛田民蔵書簡の一部がいつていますし、その時に、久留間鮫造の書簡も入っております、それは森戸と。

二村 研究所関係の史料としては、量的にはわずかですが大島清さんのところから私のところに来たものが若干あります。いずれ研究所に入れますが。大内さん関係の史料がうまく出てくれるかどうかは自信がないんですが、インターネットでチェックできるはずですよ。

小池 それは僕も見ることがあるので、僕はいいですよ。

二村 でしたらやめますが、現物史料もいま写真に撮って、いずれデジタルミュージアムで公開する準備をしており、ほとんど完成に近づいています。まだ非公開ですが、おみせすることは可能なのですが、ちょっとこの回線スピードでは無理らしいのでやめておきます。河上肇から櫛田に宛てた書簡は、櫛田家から河上さんに全部一括して渡されて、それを河上さんが全部コメントを付けて、解説的な思い出を書いて製本した形で残っています。その現物は大原にあります。

伊藤 大原はいろんな業務をほかにもなさっていると思いますけれども、現在、史料についてどのぐらいの職員がおられるんでしょうか。

二村 これはその時点でどういうふうに考えた方がいいのか。要するに、レジメの中にもちょっと書いたはずですが、現在の研究員や職員の数は、専任研究員が3人、学部の教員との兼担で8人、それから、兼任講師的な給料を出している人がやはり8人。それから、職員が専任が5人で、臨時職員が9人。そのほかに実は退職した人がボランティアで参加しています。臨時職員は毎日ではありませんから、全体では何人分ということになるのかな。

伊藤 かなりの数ですね。

二村 たしかに私学の研究所としてはかなりの数だと言っていいと思います。ただ、研究スタッフが弱体ですよ。要するに、学部との兼担ですから。しかし、私学の研究所のなかではかなりの数ではあります。

伊藤 法政大学としては、これはどういうふうに考えているようですか。

二村 外で評価していただくほどは評価されないのがどこでも研究所の宿命のようでして、外部ではかなり高く評価していただいています、法政大学のなかでは稼がない金食

い虫ですから。科学研究費などは別にして、あまり稼がず、あれだけのスタッフを抱えて、毎年かなり大きな予算を使つてと、絶えず批判は出てきます。私はしょっちゅう「私学にとって、研究所というのはダイヤモンドの指輪みたいなもんだよ」と言ってきました。要するに、余裕のある大学の証拠（笑）、一流大学である証拠なので、そこに稼げというのは無理な話だと。

伊藤 今度、国立大学は独立行政法人になって、私学的なところになる。その時に、こういうふうなものが切り捨てられるという危険性はかなりあるんですね。それでちょっといま伺ってみたんですけれども、法政大学としても、長くこれを維持するというのはなかなか大変なことだろうなど。

二村 そうですね。そういう意味では、法政大学に来てから、五十何年なんですけれども、よく維持して下さったということだと思うんです。ただ、研究所が自立できるだけの金を稼ぐことは不可能です。ですから私などが繰り返し言っていたのは、さっきのダイヤの指輪論です。これは法政大学だけでなく、大学紛争の時などには、どの大学でも研究所に対する風当たりが強く、大学によっては、研究所の専任研究員が学部教員と同じ講義負担を負うという形でそれを解決しようとしたところもあるようです。しかしそれは結局失敗したと私は思います。大原社研の場合は、逆に兼任で講義をやるコマ数を限定し、研究所の業務に集中する、学部とは違う役割があるんだということを強調しました。しかし、容易に理解されないことは明らかですし、特に私学のいまの財政事情で研究所を存続させることの難しさがあります。ですから、実際に、専任職員はもう削られています。私が辞めたあと、2人ほど。

伊藤 減っているんですか。

二村 はい。定年で辞めたあとが埋まらないという形になっています。

伊藤 それは財政的な理由ですか。

二村 財政的な理由です。これは研究所だけでなく、ほかの職場の職員も減っていますから、研究所だけは減らさないでくれとは言えない状況です。

伊藤 あと、組合運動そのものが低調になってきて、研究者もなんとなく少なくなったんじゃないかなと。

二村 それは明らかです。労働関係の研究が非常に低調になった。幸い、社会問題研究所なものですから、状況に応じて重点を変えることは不可能ではありません。もちろん労働年鑑を出し続けていますから、労働関係の研究所というイメージは強いし、集めてきた資料も労働関係が多いことも確かです。ただ、社会問題研究所ですから、そういう意味では、日本労働研究機構などよりは、スタンスは広くとれるところがありますから、それはこれからのやりようだと思います。

有馬 前に伺って史料をみせていただいている間に、スタッフの方がいろんな労働組合に電話しまして、「今年の大会の資料をワンセットください」というのをやってらっしゃるのを拝見したことがあるんですけれども、そういうふうなことは基本的にはきちんと継続されていますか。

二村 はい、続けています。これは年鑑を書くのになしでは書けないものですし、それか

ら、割合そういう意味では組合のほうも協力していただいていますから、これはできています。

有馬 こういう史料所蔵機関というのはどこでもそうだと思いますけれども、いまみたいな集め方というのはある程度いわばルーティンワークとして集められる。あとはそのスタッフが勝手に動いちゃうといいますか、自分が気になるから集めて回るといふ部分がずいぶん大きいというか、以前に、お若い方が多いので昔話になってしまいますが、東大の伊藤ゼミのごく初期に、まず、とにかく史料を持っているところを見学して回ろうという企画があって、それで、大原が富士見町よりもっと前です。三ノ橋の時だと思いますが伺って、その時に二村先生のお話を伺ったなかで、非常に感慨深く覚えているのは、メーデー会場にビラを拾いに行くという話です（笑）。公安と間違えられる。

二村 それは屑籠からポスターやらチラシやらを拾い集めていますから、組合の人たちからすると、スパイがうろろしていると誤解されたという（笑）。

有馬 そういう活動で史料収集を支えている部分というのがこういう機関のいちばんおもしろいところをつくっているんじゃないかと思います。そういう意味では、現況はどうなんでしょうか。

二村 そうした活動は今ではもうやられていませんね。要するに、それは強制できない。担当者がやる気にならないとできないことであります。

伊藤 それはそうだ（笑）。そういうスタッフを集めることはなかなか難しくなるんでしょうね。

二村 財団法人の時代は、そういう意味ではよかったです。人事異動がありませんから、司書にしても、アーキビストにしても、キャリアを積み重ねることができました。ところが、大学の付置研究所になりましたから、大学全体の人事慣行に従わざるをえませんから。たとえば、新入職員は3年で必ず異動するという原則が職員の場合にはあるわけです。

伊藤 国公立大学と同じみたいだな。

二村 ですから、大学改革の議論のなかで、私などは専門職の必要性を強調して、なんとかそういうものを育てる仕組みを考えろというふうに言うんですけども、現状では非常に難しい。専門職を処遇するシステムがないから、課長とか部長にならないと給料が上がらない。優秀な人をその現場にとどめておくことはいまの仕組みでは無理です。財団法人で大学との人事の交流のなかった時代はある意味ではよかったです。ベテランがずっと経験を蓄積してきました。

伊藤 あまり関心のない人が来たりする可能性もあるじゃないですか。

二村 たしかに限られた人数のなかでやる気のない人がいて動かないと悲惨なことになりますが、それをなんとか切り抜けると財団法人の仕組みはそれなりによかったです。

伊藤 大原社研というと二村さんで、二村さんがいなくなるとどうなるんだと。まだいまご健在で、ボランティアかなんか知らないけどやっておられるから。

二村 いや私はもうホームページ以外は手を出していません。ホームページの方はメーリングリストがあり、大原の関係者の多数が参加してメールのやり取りをしています。3年間で5000をこえるメールが行き交う活発なメーリングリストです。そこでいろいろ意見

は述べていますが。

伊藤 ご質問のある方はご遠慮なく、梅崎君、何かどうでしょうか。

梅崎 閲覧史料のなかで、音声史料について書いてあったのですが、大原社研のほうで産別会議の証言集をつくっておられますね。証言を集めていく作業はいつ頃から始まって、どういうスタッフでやっておられましたか。

伊藤 オーラルか。

二村 復刻と兼ねてやっています。いろんな時にさまざまな形でやっています。ひとつのプロジェクトとしてヒアリングをして、聞き取り記録を作ったりすることを始めたのは1960年代だったと思います。社会民主主義の研究ということで、科学研究費をとってすすめ、棚橋小虎さんやら、志賀義雄さんとか、何人かの方のヒアリングをし、テープをとりました。

梅崎 起こした速記録を公開されていますか。

二村 一部は起こしましたが、印刷するなどの公開はしてはいません。その頃はまだワープロもありませんでしたから、原稿用紙に起こすというだけで、それにとどまっています。テープは残っており、オープンリールの時代ですから、それを今の器械で使えるようにしたり、それをもとにデジタル化する作業を始めています。ただ、音声史料は、利用が非常に難しい。何時間のものを、聴きたいところだけをどうやって引き出すか容易ではないでしょう。たぶんインターネットを介して利用する史料のなかで、音声史料はいちばん最後になるんじゃないかと思います。一括ダウンロードして、自分のところで聴くというやり方をとる以外にはちょっと無理かもしれません。

伊藤 オーラルみたいな部分というのは、何か一つのブロックになっているんですか。

二村 いえ、きちんとしたプロジェクトとしてやっていませんから、その時その時でやっています。ただ、戦後史料の復刻を担当している吉田健二研究員は、解題などを作成するために一所懸命にヒアリングをし、それを『大原社会問題研究所雑誌』のシリーズとしてとびとびですが、連載しています。その一部は本にもなり、これは利用価値の高いものになっていると思います。彼のヒアリングの方法は私などから見ると、ちょっと誘導尋問的ではないかと思い、本人にも言っているのですが、あらかじめ実によく史料を見て調べているだけに、自分の筋を確認する話を引き出そうという傾向がなくはない。そのやり方だと、本人の覚えてないことまで証言させかねないぞといって（笑）。

梅崎 この研究会で、以前に高梨昌さんが来られて、日本労働研究機構の史料についてお聴きしたのですけれども、高梨さんのお話ですと、早川さんが大原社研所長時代に。

二村 いま、早川さんです。

梅崎 ある程度史料収集の分担の枠組みをつくろうじゃないかという話が出ていたんですが。

二村 ある程度の話はありました。お互いに整理能力と所蔵能力に限界があるから、分担をしようという話は総論ではあまり異議なく決まります。ただ、史料を寄贈してくださった方々の意向がありまし、そして、JILの場合は特殊法人ですから、そういうところに史料は寄贈したくないという意見をもつ方はいらっしゃる。同じような話は外国でもあり

ます。アムステルダムの社会史国際研究所が独立の民間研究所だった時代にアナーキズム関係のコレクションを寄贈されていたのですが、研究所が王立科学アカデミーの機関に改組された時に、そんな政府と結びついた研究所なら史料は返せという話が出たと聞きました。そういう寄贈者との兼ね合いもありますから、すでに入っている史料を引き渡すような分担調整は実現するのは容易ではないと思います。これから集める史料について、どこが引き受けるかということはもちろん可能です。先ほどお話しした社会・労働関係資料センター連絡協議会は、そうした調整を進めることなどを考えて作られたものですし。

伊藤 どんなどころが入っているんですか。

二村 これも大原のサーバーのなかに社会・労働関係資料センター連絡協議会のサイトがありますから、正確なことはそこでご覧になれます。日本労働研究機構、東大社研、東大経済学部、同志社大学人文科学研究所、大阪社会運動協会、労働科学研究所や連合総研、それから、中央大学の図書館のような一般図書館も入っています。全部で20ぐらいだと思います。

梅崎 労働組合の動きとしては、たとえば造船と鉄鋼が一緒になったり、産別組合が統合している動きがありますね。こういう状況だと、史料というのは捨てられてしまう可能性が高いのではないですか。

二村 はい、その通りです。実は、労働資料協議会をつくる話を、戸塚秀夫氏と私とで始めたのは、労働組合の合併が進展していて、史料が廃棄される恐れがあることを懸念したからでした。そこで、お互いにそうした情報を早く入手して、どこかで保存するようにしないと永久になくなってしまふぞ、ということで始めたことなんです。ただ、運動の規模にくらべ、その史料を保存する方は決定的に力量が不足しています。戦前の大原社研は40人のスタッフで、最大時でも、組織人員が40万人程度だった労働組合を相手に史料を集めていました。今の大原社研は、十数人のスタッフで1000万を越える組合員がいる運動の史料を、戦前と同じレベルで集めろと言われても、とてもできません。ただ、インターネット時代で、情報がデジタルで行き来し、保存できるようになってきていることは、これが本当に進んでいくと、別の形で、わりあい容易に史料を収集保存することが可能になるかもしれません。多くの労働組合や社会運動団体が、情報をオンラインで載せるようになってきていますから。

伊藤 デジタル化の場合に、入力の労力というのはどういうふうに。

二村 和書・洋書のデータベースの入力は、大原研究所の図書係の活動と結びついています。つまり図書の購入段階からデジタル情報を作成していますから。論文データベースは文献の選択は研究員が分担し、その入力はデータベースを担当する臨時職員によって行われています。これは同時に『大原社会問題研究所雑誌』に毎月掲載している「社会・労働関係文献月録」の原稿作成作業でもあるわけです。つまり研究所の日常活動の多くが、デジタル化されています。

伊藤 外注しているわけじゃなくて、なかでやっているんですか。

二村 過去にすでに活字化してあった所蔵図書目録や社会労働関係文献月録の入力、遡及入力分はすべて外注しました。また、ロシア語など外国語文献の一部などは今も外注して

いまし、個人文庫の整理や画像データや音声データのデジタル化なども外注しています。

伊藤 それがなかったらできないだろうなと思います。

二村 そうですね。内部だけで入力できる年間件数は5000件程度ですから、15年間でも7、8万件にしかありません。現在各種データベースの総件数は30万件を超えていますから、外部への委託入力はかなり高い比率です。

伊藤 持っているものの数の桁が違いますからね。ほかにご質問はございませんか。それでは、きょうは本当に二村先生から充実したお話をありがとうございました。またいろんなサイトやなんかのお話もございましたので、そこからも情報はとれるということはよくわかりました。本当にありがとうございました。お手数をおかけいたしました。

(終わり)